
アイアンマンソウル

バラクーダ高橋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイアンマンソウル

【Nコード】

N8162I

【作者名】

バラクーダ高橋

【あらすじ】

ジパングが最もアツかった時代に生きた殿様に、次々と襲いかかる文明のカオス。

ナチュラルボーンクレイジーな殿様の運命や如何に!?

それ行け殿様

「殿、超大変ですぞ本気に」

と、家来Bが怒鳴り込んできたのが5時間前。これが全ての始まりだった。

やけのはら（テキーラにタバスコを垂らしたものを26杯飲んでいたおれは、あまり家来Bの報告も聞かずにとりあえず白い馬に乗って「行くぞコラッー!!!」と叫んで走り出した。

そう、血が?????たぎったんだな

およそ10万の大軍を率いて家来Bの指さす西へとひた走った。

4時間も走った頃だろうか、西の彼方からランボルギーニLP2000が走ってきたのが見えた。

「なしてランボルギーニよ」と、おれは言った。

だが、よく見てみると何やら様子がおかしい。すると家来Bが言った。

「殿、アレですぞ…アレが例のアレですぞ！」

おれはハツとした。ランボルギーニの2ドアの窓から、家来Cと家来Dがハコ乗りをしているのが見えたのだ。ふと横を見ると、家来Bが「ムムウ…」としかめっ面だ。

おかまいなしに「イエーイ」てな感じで突っ込んでくるランボルギーニ。 “ひかれるぜ” と思った時にはもうステに遅い。

おれの乗ってた白い馬の足が「ボキン！」と鳴って砕けたのが分かった。

そのままおれはフロントガラスにへバリ付き、26杯分のやけのはらを思い切りドロップシットした。

その刹那車内を見ると、運転席には血走った目の家来A、助手席にはカタログを膝に乗せたガイジンが窓から身を乗り出してハコ乗りを楽しんでいる家来Dを邪魔そうにしながら座っていた。

じじいめ?????????謀反だ!!!

それ行け家来B

殿の愛馬”ダスキン号”は死んだ。

墨を塗られ「牛みてえだ、わははは」といたずらされても怒ることは無く、むしろ「やめてよモ〜！（牛なだけに）」と言いたげな雰
囲気すら感じさせる名馬だった。

その名馬を溺愛していた殿の怒りは当然尋常を逸しており、事件直
後から三日経った今でさえ近づき難い険しい顔色で、酒を水のように
飲んでいる次第。　　〜家来Bの日記より一部抜粋〜

「オオウ家来Bよ、どうすんのよ本気に」

愛馬を殺られた殿はトサカにきてイライライラしていた。

「落ちて置いて下されよ。いい案がうかびました私」

「オオウオオウ家来Bよ、本気かよお前よ。だってお前はよ、家来
Cよりは頭良いけど家来Dよりは頭悪くて家来Aと同じくらいじゃ
ねえかよバカヤロウがよ」

少々みくびられた家来Bだが、それに動揺することなくジツに堂々
とした態度でこう言い放った。

「喫煙は、あなたにとって心筋梗塞の危険性を高めます。んで、疫
学的な推計によると、喫煙者は心筋梗塞により死亡する危険性が非
喫煙者に比べて約1.7倍高くなりそうな感じ……………っ…だ！ええ
と、詳細については、厚生ロードショーのホームページをご参照く
だされよ！本気に！！」

拙いながらも、突然の家来Bからの忠告に啞然とする殿。

が、家来Bという人は急にこうなってしまう事は重々承知していた
事だ。一瞬にして我に返った殿は

「お前何だいきなりゴラツ！！オオ！？切り刻むぞチョンマゲ野郎
が！！馬鹿が！」と吼えたのだった。

こいつぁ…三途の川が見れそうだ!!!!

激情

殿の怒りを買った家来Bは、ボコボコにされて一通り罵られた後、またボコボコにされた。

思いついた妙案を進言するその前に、殿の拳が飛んだのだ。帯刀していたらと思うと、足がガタガタ震えだすこの昼下がりの惨敗に乾杯。
（家来Bの深層心理より一部抜粋）

短い夏が終わり、馬肥緩む秋の訪れを感じる今日この頃。

殿はこの季節が超好きで、暦が九月に差し掛かるとやたら外に出たがるようになる。

丁度この日も穏やかな午後だった。

”ダスキん号”を殺られてから準アル中状態の殿は、相も変わらず”やけのはら”を飲み続けており、意識おぼろげながらも”ダスキん号”の後釜である漆黒のジャガラプメロキデンマキャンタマライソリニシドレミアソラシムラツキョウカアサンソナニブタナイデアオタンガデキチャオンナノヒトリモデキンカラツキョウウイデイデイテテテイツテキマスこと”デープリンパクツ号”に乗り、どこぞへ散歩に行くらしい。

”散歩”というだけで、家来Bを含めた家臣以下末端の兵士まで合わせた総勢一万人は大慌て。

急いで支度を済ませスピード狂の殿と共に城を飛び出していかねばならない。

例えば、殿が毎日散歩を望めば時速80キロの大名行列が連日行われる事になる。

しんどいのは、馬も例外では無い。これまでに何頭の馬が不味い馬刺になつてきた事か。

「アリア、今月も赤字だ」

家臣が嘆く中、準アル中の殿曰く「モカレヘムヒホヒレーマヒアム
セヒモチヨホフフヘーフヘーマライア（おかげでウチの騎馬兵隊は
無敵を誇るくれえ強えじゃねえか）」

確かにこの軍は強い。殿も言うように騎馬兵隊は負け知らずである。
その秘密は騎馬兵隊を自ら率いて先陣を譲らない殿自身にあるのだ
が…。

少々肌寒い秋口の、いつもの散歩道の景色はどこへやら。殿の後を
追っていく家来一同には目的地なんざ分かり得ぬ事。気付けばこの
一軍は、見知らぬ山中へと突入していたのだった。

パンダさん

「殿、いったいどこへ向かっておられる…?」

あまりにも見慣れない景色に一抹の不安を抱えながら、家来達は殿を追った。

しばらく走り日も沈みかけた頃、山の中腹辺りで少し開けた場所へ出た。

「おし、てめえら野営の準備だ」突然殿が言った。

散歩を終えたら帰るつもりだった家来達に緊張が走る。

「いや急になに言ってるんだ、このアホはよ? (でも怖くて言えない)」「全員がそのように思っていた。

「申し訳ありません殿。いつも通りの散歩と思い、あいにく野営の準備を整えてきておりませぬ故…」

前の不遜から意見しづらい感じて尻込む家来Bに気を使って、一番若い家来Jがブツ込んだ。

『うわっ知くらね。若気の至りだかなんだか知らないが、ヤラれちまうなコリヤ。おれみたいに…フッフッフ…ウッフッフフウウハハハワハハハハハ!』
　　家来Bの心情LIVE中継より一部抜粋)

今まで最も近くに侍り殿に進言し続けてきた自負、そして根っからの腹黒さから、家来Bは何だか妙な気分。

ところが殿はというと

「ああ、そうかい。じゃあてめえらは帰ってよしだ」と、珍しく冷静な答え。

「!? 殿、なりませぬぞ。このような所に我が殿一人にするなど断じて許されませぬぞ!」

思わず家来Bが叫ぶ。

「ほう、じゃあお前だけ残れ。何かあったらお前が何とかするんだ分かったな？」

よし、後は帰るとけやオラ」

「いや、ちよっ……」

「さっさと行け！シバくぞクソ共が！」

「……………」

「では殿の事、宜しくお頼み申しますぞ」そう言い残し、みんな行つちまった。

展開の早さについていけず、開いた口が塞がらない家来B。すると「そうしょげるんじゃねえよ。パンダさんに会いに行くだけだ。オラ行くぞ」殿はそう言つて、再び馬を走らせた。

「パ、パンダさんですと！？ああ！待つてくだされよ殿お……」

驚いた家来Bは、驚ききる前に再び殿を追いかけるのだった！

パンダさん セカンド

嘘くさい話だが、30年ほど前に喋る獣が発見されたと噂になったことがある。

なんでも白に大きな黒の斑点があり、体軀は小熊のような奇妙な生き物だと、城下ではえらい騒ぎになったらしい。

変種の熊というより”もののけ”の類ではないかという説から、この妙な生き物に近づかないよう発見されたという城の裏手にある山が立ち入り禁止になったのだ。

ーそういえばだが、この山がその山だ。

大木がうつそうと生い茂り、あらゆる動物達の鳴き声だけが聞こえてくる。冷静になってみると、小心者には十分怖い感じがしてくる感じ、てな感じだ。

嫌々なイメージしか出てこず、青い顔をした家来Bはとにかくはぐれまいと必死に殿を追った。

殿は険しい山道はずれさらに険しい獣道に入っていく。恐ろしい事に速度を保つたままだ。

一度はぐれたら最後、帰り道など分かるハズも無く、家来Bは命を削って殿に食らいついて行った。

「どつどつどつ、止まれオラ」

突然殿が馬を止めた。少し遅れて家来Bも到着。

「ハア…ハア…どうなされた？殿…小便でもした…」

「着いたんだよアホンダラ。バカ」

「はて？辺りを見回してみても何もござらんようだが…あ！まさかここで私と心中な…」

「うるせえなおめえは。置いてくぞ。バカ」

そう言うと殿は、手綱を木にくくり付け下の方へ降りて行ってしまった。

慌てて後を追う家来Bだったが、酒が抜けきつてなかった殿がコケていたのですぐに追いついた。

「ああ！フフ：大丈夫でござるか！？」笑いをこらえて駆け寄る家来Bに、バシン！と無言のローキックが飛ぶ。「ぐへっ」と気持ち悪い声を上げながらよろめく家来Bは足を踏み外し、小高い段差から落ちていった。

「ぐへあっー！！」と気持ち悪い叫び声がこだまする。

「おお、そこだったか。いい仕事したぞバカ」そう呟くと、殿もその小高い段差から降りて行った。

だが、やはり酒が抜けきつていなかったようで、着地と同時にバランスを崩し隣で腰を押さえながらのたうちまわっている家来Bの上に尻餅をついた。

「ぐへっ！！」

「ここだ。ここがパンダさん家だぜ」

例の”もののけ”がパンダさんという名前だと教えてもらったのは殿からではあるが、あの時も殿は相当酔っぱらっていた。だが出発時こそそれらの回らない酔っぱらいだったが、いつの間にか酔いも冷めた様子。

そしてなにより、さほど大きくはないが目の前に怪しげな洞窟が口を開いて待っており。

『なぜ家を知っている？殿とパンダさんに繋がりがあるとい事なのか！？』

色々な懸念をはらませつつ家来Bは叫んだ

「おおお、武者震いじゃ！（ビビっている）」

「うるせえってんだ。バカ」

小高い段差を降り、左手に見えるその洞窟にいよいよ二人は入って

い
っ
た。

パンダさん サード

「ひっさしぶりじゃあパンダさん。ワシが来たぞオツー!!」
洞窟に入るなり殿が叫んだ。

「殿…ひと昔前に噂になったあのものけであるパンダさんとはお知り合いなの…」

「うっさいの〜アホ!そない叫ばんでも聞こえとるわ。はよ入ってこんかい!」

驚いた事に、洞窟の奥から返事が返ってきた。

「おおお、本気だったのか…!また武者震いがきおったわ(またビビっている)」

「カツカツカツカツカ相変わらずだぜあの物言い」殿は嬉しそうにしながら奥へと進んでいった。

緊張した顔で家来Bも付いていく。

一歩また一歩と進んでいくうち、蠟燭の明かりがぼんやりと見えてきた。洞窟のわりに空気はこもっておらず、時折風の音が奥から聞こえてくる事から、どこかで吹き抜けになっている事が推測できる。もののけの隠れ家にはうつつつけの場所というわけだ。

「おお、殿さん。お久しぶりやんけ」

その声と共に噂通りのものけが洞窟の奥に見えた。白に大きな黒の斑点、体軀は小熊を少し大きくした程で、体中毛の生えた獣のくせに人の言葉を喋る。

「うわわわわわ……!」驚いた家来Bは腰を抜かして気絶してしまっ
った。

「うつつ…む。変な夢をみてしまっ…」目覚めた家来Bは寝ぼけてい
た。するとそこへ

「夢ちやうわ！思っ切り現実やで家来さん」パンダさんは笑いながらツツコミを入れた。

「うわ！出た！！」寝起きで驚く家来Bだが、殿の肩パンチで現実だという事を理解した。

「痛たたた…。いやあ～しつかし…ううむ、いやあ～…ねえ？まあ…」言葉にならない家来B。

「オオウ家来B、おれのガキの頃からの友達のパンダさんだ。バカ」殿はさっそく酒を飲んでいた。

「まず先ほどの無礼をお許しください。私は殿の側近中の側近、家来Bという者で御座います」ようやく落ち着いてきた家来Bは、ピシッと挨拶をキメた。パンダさんは、うんうんと頷きながら酒を注いでいる。

「つきましてはパンダ殿、私聞きたい事が山ほど御座います…」

「ここが山の中だけにか！？がはははは！なんでやねんな！」

一人ノリツツコミをかつ飛ばすパンダさんに、殿と同じ自己中心（空気を読まない。読んでも無視しやがる）的な臭いを感じる家来Bだった。

パンダさん フォース

「ワシが何故このように喋れるのか？そしてこの殿さんとは、どないして知り合ったのか？そもそもワシはなんなのか？家来さんが知りたいのはこんなところやろ？」ちびりと酒を飲みながらパンダさんは言った。

「おおお、まさにその通りでござる…」

即座に身を乗り出した家来Bの目の前に、パンダさんはまず杯を差し出した。

「この話はちよいと長くなる故、まあ酒でも飲んでゆっくり聞きな」

見た目こそ獣とはいえ、この瞬間に家来Bは彼の器の大きさを感じた。言われるがまま杯を手にとり、パンダさんよりあまり得意ではない酒を一献頂いた。

殿は黙って飲み続けている。

周りが岩で覆われていること以外、城でもよく見る家具や寝具が並んでおり、とてももののけの住処とは思えない部屋模様だ。

蝋燭の薄明かりの中にて人間二人ともものけが一匹、ちびりちびりと酒を酌み交わす。

今、外は夜なのか朝なのか？岩に囲まれたここからでは知る由もない。

「あれはワシが20そこそこの時やったかなあ…」
パンダさんはゆっくりと語り出した。

遡る事、30年前

30年ほど前、この土地より西に太坂という土地があり、そこに福部 全蔵という若い忍びがいた。

忍びの技を極め尽くした彼は、あっという間に有名人になる予定だったので、手始めにこの辺で有望株だったナンチャラとかいう大名へ仕官するべく、その城へ向かっていた。

「ワイの腕前を一目見せりゃあ誰しもが感動し、涙を流すに違いなし。」おぬし、お願いだからウチに来てくれぬか！」なぐんて言われちまったりしてからに！がはははははははははは……ホンマに！」彼は脳天気、そしてポジティブだった。

一山越えた頃だろうか、合戦に丁度良さそうなただっ広い原っぱにでた福部 全蔵。

ここを越えて少し行った先に目当ての殿様がおられるわけで、彼はもう嬉しくなっちゃって、ものの全速力で原っぱを駆けた。

シユタタタタタタタタタタタタタタタ！

しばらく走った頃だろうか、南の空に緑色の物体が浮かんでいる事に気付く。

「あん？なんじゃありゃあ？？」福部は立ち止まり、思いつきり首を傾げた。

その物体は少しづつではあるが、自分に近づいてきているように感じた。

あまりの珍妙さに、かれは得意の手裏剣を投げてみた。

シユルルルルルルルルルルル……グサッ

獲物めがけてうなりを上げた手裏剣だったが、届く遙か前にあえなく失速し地面にめり込んだ。

「ぬつぬつ！こうなつたら！」福部は様子を伺う意味で、敢えてここは身を隠そうと目論み、忍びの七つ道具の一つを取り出した。バサッ！「フッフッフッフ雲隠れの術や。近づいたが最後、一瞬であの世行きやでえ〜」ほくそ笑みながら隠れる福部。

だが次の一瞬、ギャン！という音と共に布の下からでも感じられた日の光が遮断され、まるで軒下にいるような重苦しい暗がり福部を包んだ。

「んああ！？なんやねんこれ……！！」
恐る恐る布をめくり、ゆつくりと顔を出し外をしてみる。

すると、さつきまで手裏剣も届かない位置に浮いていた緑色の物体が、寝そべる福部の真上に迫っていたのだ。

「ど、どないやねん……」

驚きのあまり体から力が抜けてしまった福部。それはあまりにもデカイ、鉄で出来たスイカのようなだった。

「スイカの化けもんや……！スイカの親分がスイカ嫌いのワイを殺りにきたんや！」

忍びの天才福部は、速攻で死を覚悟した。

圧倒的な質量とスピード、それに目的不明の巨大スイカ。これだけで彼の心を折るには十分すぎる。

「お師さんよ、明日が見えへんわ……」

これより彼は殺されはせずとも、あまりに過酷な自らの運命を呪うこととなる。

時を同じくして、名家の大名の息子である齢10ほどの少年が、東の町で家出をしたと大騒ぎになっていたそうな…

遡る事、30年前 セカンド

「若アー！っ！お待ちください！！」

「うるせえ！ここで勉強してたつてなんも面白くないんじゃ！」

30年ほど前のある大名の城に、たいそうわんぱくな少年がいた。とにかく落ち着きがなく、一所にじっとしているのが苦手で世話人の目を盗んでは外へ飛び出し、生傷を作つて帰つてくるという絵に描いたような悪ガキだった。

ただ運動神経ははずば抜けているようで、剣の腕前はそこいらの大人じゃ敵わぬほど達者だし、一度逃げられたら最後、城の中では彼に追いつける者は誰もいなかった。

だが、城の主である殿様はそんな彼の内に秘めるカリスマ性とも言おうか、人を惹き付ける何かを感じており、第三子にして跡継ぎにと考えていた…とかいないとか。

世話人のチクリにも「カツカツカッカしゃあねえガキだ」と、えらい寛容な態度で見守っていた。

それにはそれなりの訳がある…とかないとか。

現大名の父、少年にとって祖父にあたる先代の大名が亡くなった時の話である。

6年前のこの時、少年はわずか齡4つを数えた程だったが、性格はこの頃より今に至るまで何も変わっておらず、また世話人の目をいかにして眩まそうか機をうかがっていた。

だがこの時既に先代は亡くなっており、葬式へ向けて鬘を結い直した所だった。

そこへ彼の父が逃げ出さないよう釘を刺しにやってきた。

「おう、支度は整ったか？今日は爺様を弔う日じゃ。大人しくして

おるんじゃぞ」

そう言つて殿は部屋を出ていく。次いで少年と世話人も部屋を出た瞬間だった。

ダダダダダダ！と殿が向かう方向とは逆の方向へ自慢の俊足で逃げ出した。今日ばかりはさすがに大人しくしているだろう、とタカを括っていた世話人は呆氣にとられていた。

が、「爺様が死んであの世へ旅立つというに、それを見送らずどこへ行く気じゃコノうつつけ者があつ！！」

殿の一喝が廊下に響く。いつもならそれでもお構いなしに走り去っていた少年だったが、今回は何故かいつもと違う物に感じた。

少年は立ち止まり、殿様の方へ歩み寄り「申し訳ありませぬ父上」と、深々と一礼したのである。

それから行われた式中也凜とした姿勢を決して崩さず、大名としてこの城と町を守り続けた爺様を立派に弔ったのだった。

泣いて悔やむ人達を見、感謝と大名襲名の意を語る父を見、この時、少年は初めて人が死ぬという事を理解したのである。

遡る事、30年前 サード

「むうう！若はどこぞへ行ってしまわれたのか！」

世話役は使用人達にもお願いして、城内を必死に探し回っていた。するとそこへ

「大変でござる！若が馬を強奪して外に……！」

「ななななあにい！？いかん、いかんぞそれは！直ぐに追いかけるのじゃあ！」

世話役達は馬に乗り、一目散に城を飛び出した。二手に分かれ、城下町を縦横無尽に探し回る。

「わずか齡10の若君が一人で出歩くな……！人さらいにさらってくれと言ってるようなものじゃ。何としても探し出さねば、この首だけでは済まぬ問題じゃ！あああ、ヤバいやバい！」

日が暮れるまで探し回った世話人達だったが、結局若君は見つからなかった。幸いというか何というか、戦の遠征中につき、殿の留守中の出来事であった。

その頃、問題の若君はというと……

「はっはっはっはっは！やっ自由を手に入れたわい！」

事の重大さなどつゆ知らず、これからどうしてくれようかと、テンションが上がrippばなしでしょうがない感じだった。

気の向くままに馬を走らせ、道なき道を走ってゆく。気付くとそこは、危険な香りがプンプンする森の中だった。

「おおお、いいねいいねえ」

若君はスリルが好きな質なので、遭難などは大歓迎である。

ペースを落とし、パツカパツカと馬に揺られながら森の中を散策し

ていると、綺麗な水の流れる小川を見つけた。

「よし、しばし休憩じゃ」

馬を降り、小便をしてから川で手と顔を洗い、川べりに転がっている丁度よさそうな岩に腰掛けて少し物思いにふけた。

「うづむ、晩飯が無いのは問題じゃのう…城の者も心配しておるだろうしのう。」

てか今父上が帰ってきたら、あやつら問答無用で打ち首じゃろうのう…ふっふっふっふっふ。

てか晩飯の事考えてたらホントに腹が減ってきたのう…。

刀も持ってきておるし、熊でも斬り殺してしのぐかのう…いやあしつかし、腹が減ったのう!!ブツブツ…」

色々考えた末、今夜中に帰ってやる事にした。

「おおおし、もうちょい奥まで入って猿でも捕まえて帰るとするか…うんん!？」

立ち上がった瞬間、水面に丸い物体が横切ったのが目に入った。すかさず振り返り上空を見上げると、生い茂る木で全ては見えなかったが、丸い上の部分がスイ〜とゆっくり空を移動しているのが見えた。

「なんじゃありやあ?緑で丸っこい…スイカの化け者か?」

考える前に行動するタイプの若君は、そんな事を考え始めたころには既に、スイカの化け物の下まで到達していた。

「止まれ止まれい!なんなんじゃお前はバカヤロウ!」

刀を振り回しながらスイカの化け物にケンカを売る若君。

そこから少し追いかけた先に出た少々開けた場所で、そのスイカの化け物は移動を止めた。

「おのれ無視か!名を名乗らんかいコノヤロウが!」

若君は興奮して未だにわめき散らしている。

するとスイカの下から4本の棒が出てきて、スイカはゆっくりと地面に着地した。

次いでパツシューウという音と共に、棒の出てきた間が襖のような感じでゆっくりと横に開き始めた。

どうやら扉のようである。

「オオホホツ…何か出てきよるっばいのう！楽しみじゃのう！！
わはははははは…！！」

刀を握りしめながら、今までの人生で最大のウキウキが若君を襲う。
「フオオオ武者震いじゃ！はっはっはっはっはっはっは…！！森最高！！」

遡る事、30年前 フォース

コツコツコツ…

「どうもどうも！こんちゃ〜。お兄ちゃんは遠いところからやって来たミヒヤイルってんだ、よろしくな！」

スイカの化け物の中から見慣れない格好の人間が出てきた事と、そいつがえらいフランクだつて事で、若君は少々混乱した。

「ふっ…ふはは、わはははははどういう事じゃ意味が分からぬ！はははははははは！」

混乱して、何やら笑えてきた若君。

「おお、変な子供だぜコリヤ。まあさ、中に入んなよ？おやつにしようぜ！」

訳の分からぬままミヒヤイルの勧めに従い、若君は爆笑しながらスイカの化け物の中へ入っていった。

スイカの中は木と畳に囲まれて育った若君にとってまったくの異空間。

石のような床に鉄のような壁で、なにやらピカピカといたる所で赤だの緑だの色々な光が点滅している。

そして密室だというのに外のように明るい。

「聞きたい事は山ほどあるが、まずどういふ訳でスイカが空を飛んでおるのだ？」

少し冷静になった若君が言った。

「う〜ん、言っても分かんないと思うぜ？さつき会った大人にも聞かれてさ、色々説明したけど分かってくれなかったしねー」そう言いながら、ミヒヤイルは次の部屋に向かっていった。

「こつちでお茶にしようぜ。おれも聞きたい事とかあるし、ゆっくり話そう！」

「うむ、分かった」言われるまま若君はその部屋に入っていく。

「ところで君さ、いつまで馬に乗ってんだい？」

「む？おお、忘れておったわ」若君は馬を降りて、ミヒヤイルの勧める椅子に腰掛けた。

茶を煎れに行ったミヒヤイルを待つ間、部屋をじっくり見回していた若君は、部屋の隅に白に大きな黒の斑点模様の獣のような物がうつ伏せになって寝ているのを発見した。

「んお！？なんじゃありゃあ？」

「お待たせ」茶を持ってきたミヒヤイルにも気づかず、若君はその獣を凝視していた。

「ああアレはね、パンダってゆう動物さ！普段は大人しいけど怒るとすげえ凶暴なんだぜ」

「ほおお、ぱんだというのか……」初めて見るツートンカラーの動物に、若君は少し感動していた。

「ふっふっふっふ驚くのはまだ早いぜ僕ちゃん。なんとあいつは人の言葉を喋れるのさ！」

ミヒヤイルは自慢げに言った。

「喋る！？獣が言葉を話すのか！」

「そうだ。おれが喋れるようにしたのさ！おれの発明でな！すごいっしょ！？」

「ほほ、凄いいではないか！是非喋ってみたいものだ」若君は子供らしく、目をキラキラさせている。

「でも今は寝てるからちよい待ちだな。まあその内起きるだろうから、そしたらお話してみるといい」

超嬉しそうな顔で、ミヒヤイルは言った。

それからもう若君の興味は「パンダとお話」の一边倒で、ここいらの取材に来たというミヒヤイルの質問には「ああ」だの「うん」だの「まだ起きぬのか？」だの「分からん」だの、適当に流してひたすらパンダを凝視していた。

「も〜ちゃんとお兄ちゃんの話聞いてくれよ〜」

お手上げ状態のミヒヤイルがそう言った時だった。

ビービービー！と耳障りな音が部屋中に鳴り響いた。

「む、何事じゃ！敵襲か！？」若君は腰に差した刀に手をかけた。

「うわっやべえ！ポリ公来やがった！！」なにやら焦っているミヒヤイル。

「悪いお前ら、ここに置いてくぜ！！じゃあなー！！」

隣の部屋に走っていったはずのミヒヤイルの音がビービーという音と共に響いた。

それと同時に一瞬で床が無くなり、若君と乗ってきた馬それに部屋の隅で寝ていたパンダは外の山に落とされた。

ドシーン！「ぐううう！なんじゃいな！」上を見上げると、もう既にスイカの化け物は消えており

周りを見回すと馬とパンダが転がっているだけだった。

落ち着かない若君は、手に持っていた茶菓子で出されたスナック菓子を、無意識に口に入れた。

そしてその凄まじい苦さに

「ぐおおおおおお！！苦いわ！！」

と思い切り叫び声を上げた。

その声に反応してか

「うるっさいのう、ほんで体が微妙に痛いのはなん……うおお！！なんじゃこの体は！？なんでや！なんで毛むくじゃらになっとなね

ん!？」

と、遂にパンダが起きたのである。

出会ってしまった運命の一人と一匹。

遡る事、30年前のお話である。

大儀

「がっはっはっは！懐かしいのう」

まるで楽しい思い出を懐かしむように、パンダさんは豪快に笑った。話の途中で寝てしまった殿の横で、都市伝説と化したパンダさんの真相を食い入るように聞き入る家来B。

酒をちびちびやりながら、パンダさんは再び語り出す

若かりし頃の殿と、ミヒヤイルに物の怪にされてしまったパンダさん。

パンダさんが住処にしているこの洞窟にあるこれらの物資は、殿が城からかつぱらってきた物らしい。

その見返りというわけではないが、友達の動物達から得る周辺諸国の状勢等を殿に教えてあげているのだそうだ。

「人と接する事ができなくなってしまった寂しさを、こいつが埋めてくれたんや。むっちゃん感謝してるで」

「最初は興味本位おもしろ半分だったかな、パンダさんおもしれえし、だんだん情が移ったつうかなんつうかムニヤムニヤ……」

「そこで寝るんかい！最後まで言わんかいなアホ」

もちつもたれつ、ギブアンドテイク。そのような関係というより、二人は親友のような間柄であることは容易に想像できた。

城の者、次いでは城下で我らを支えてくれている民に知らせなかったのは

「物の怪であるワイは、人に世話かけさせるだけやろう」というパンダさんの意向からだった。

「ミヒヤイルを恨んではないのか？」という家来Bの質問にも
「確かにそういう時期もあったが、これもワイの運命やしこのおもしろい殿様とも出会えた。それに動物と話せんねんでワイは。ええやる？がっはっはっはっは」と、豪快に笑い飛ばす。

そんなパンダさんに家来Bもガツチリ惹かれていた。

「はや〜私にはまったく想像もつきませんわ……よくよく考えると、殿然りパンダさん然り…私は凄まじい人物達に囲まれておる。何だか力が沸いてくる心地ですわい！」

「そりゃええこつちゃ。だがな家来はん、こいつがここに人を連れてきたんわこの30年でこれが初めてやねんで？つまりは、あんさんも十分おかしな部分を持つとるいうこつちゃ！」

「えええ！？私はそんな技も特技も持ち合わせておりませんぞう！私なんてホントにもうそりゃあ……」

「がっはっはっは何をそんなに慌てとんねん。でも殿さん言つてたで〜ウチにももの凄い頭のええ家来がおる言つて。人を誉めへん殿さんが、唯一そいつの事はエライ楽しそうに喋つとつたんや。将来が楽しみや言つてな」

それに対する家来Bの動揺と謙遜は言うまでもなく、いつしか外には日が昇り始めていた。

「いつまでもゴチャゴチャとつるせえのう……」
ブツブツ言いながら殿が目覚めた。

「あ！やっとお目覚めですか殿。

今丁度この世を占う話題で盛り上がっていたところでんがな！」
家来Bはパンダさんの関西弁が変にうつってしまっていた

「てめえ朝っぱらからケンカ売ってんのかコラ」
そう言うと、ヨタヨタと家来Bに歩みより、家来Bの背中に思い切りケリを入れた。バシン！！
「グヘッー！！」

気持ち悪い家来Bの悲鳴はパンダさんのツボだったようで、毛むくじらのデカい体でゴロゴロと笑い転がっていた。その直後である。事は急転直下、殿の口から驚くべき宣言が飛び出した。

「家来B、てめえをここに連れてきたのはおれの中で決心をつけるためだ。おれが生まれるより前に失われたこの世の軸は未だ定まらず、悪政蔓延にして下々の者は疲弊し死を待つのみ。

先代の意志なのか何なのか、跡目のおれは訳もわからずこの領土を守ってきたが、それもはやこれまで。

これからおれは打って出る事にするからよ、てめえはさっさと帰って軍議の準備だバカヤロウ！」

初めて聞く殿様らしい言葉に、家来Bは体に電流が走る感覚を覚えた。それと同時に殿の大儀にも感銘を受け、何というか、心に超熱いものがこみ上げてきた。

「は、ははッ！では直ちに参りましょう！」

「おれはパンダさんと話すことがある。てめえだけ先に行ってる」

殿の迫力に負け、付き人の志願も出来ぬまま慌てて家来Bは洞窟を後にした。

「エライ時間経ったが、ついに動き出すんかい。しかもお前らしいイキナリや」

ニヤリと笑いながら、パンダさんが言った。

「ああ、こないだ謀反があつてな、その時から考えてはい……………」

「殿オ！！ハアツ…帰り道が分かりませぬ故道に迷うとこでしたわあ！！ハアツハアツ…あつぶねえ…」

「B、てめえは……」

この後家来Bは、パンダさんの友達の小鳥にナビをしてもらいながら、止まらない鼻血をすすって城へ戻っていった。

血で血を洗う戦乱の世、これより数年の後にこの殿様の名は全国へと知れ渡る事となる。

転機

「謀反を企て、この城を去ったあのクサレ共はどうなったんだ？」
「ラ」

「この城の者に報せは届いておりませぬ故……」

「ちつ、あのクソ共ランボルギーニLP3000に乗ってやがったよなあ？」

「殿、3000ではなく2000ですぞ……フフツ」

「てめえB、何半笑いしてやがる？」
「ラ」

「いやいや、だって殿が……ねえ？フフツ……」

「おいおい、完全に笑ってんじゃねえかてめえ。最近酒を減らしてよ、おれが丸くなったとも思ってたのか？」
「ラ」

「酒の減量は健康の為に良い事だとは存じておりますし、丸くなつたからといって決してそのような……ねえ？」

「ねえ？じゃねえんだよ、ねえ？じゃ……」

「あ！殿は細マッチョであらせられるではござらんか！」

「てめえB、なに酒太りと掛けたような事言ってたんだよ。体型の事なんざてめえ一言も言ってるねえしよ、しかも“あ！”て何だ。

“あ！”て

「いやまあ、その…ねえ？ホントにあの…ねえ？LP2000だから3000だけ…ねえ？近頃の若いモンは…ブツブツ」

「あ？若いモンが？どうした？お？2000？3000？あ？」

「いやまあ殿、落ち着てくだされされよ。今そんな事言ってる場合ではござらんでしょうに…ブツブツ」

「てめえB、な〜に話を逸らそうとしてんのよ？てめえが半笑いでおれをバカにしてやがるからこうなってんじゃねえか」

「いやいや殿、私めに不遜があつたことはお詫び申し上げます。皆これからの事について色々試行錯誤していかなければなら…」

「だからよ、話逸らすなってんだろがB」

「殿オツ！殿オオ！！な〜げ解っていただけぬのか！？殿自身が言い出した事ですぞ！長きに渡り心骨砕身この命殿に捧げる我らは今しがた遂に殿の心を知つたのですぞ！？我らの焚き付けられて間もない心炎を、早速にしてこのような押し問答でないがしろになさるおつもりかあッ！！？」

「……フツ……フハハハハハハハハハハッ……！！」

「……？な、何がおかしいのです…！」

「オウオウ皆の衆よ、これがBだ」

「え！？いや、今のはつい……！申し訳ありません！！」

「カツカツカツカ……！いや、それでいいんだぜ？B。この中でおれに文句タレたりよ、バカにしたり出来んのは、てめえだけだなんだぜ。クツクツク」

「……………？（どういう事だ！？最後のクツクツクが怖いなあホントに！）」

「おれの代になってからというものの、大戦というべき大戦は未だやってねえ。だがまあ、それなりの戦を幾つも乗り越え、この領土は安定を見せているわけだ。そんな猛者揃いの我が軍にあつて、このおれに噛みつけるバカはB、てめえしかいねえんだよ」

「は、はあ……………（助かつてるのか！？）」

「まあそんな訳でよ、皆の衆。これよりこのBのバカヤロウが総司令官的なアレになるぜ。解つたな？」

静まり返っていた大広間に「オオ！！」という声がこだました。

この場を集められた將軍や文官等、いわゆるこの領土を守り続けてきた重鎮達にも、家来Bが“何となく奇才の持ち主っぽいなあ”てな感じであることは十分に感じていた。

従つて異論等はなく、身の心配ばかりしていた家来Bをよそに人事は殿の独断でサクサク決められていった（最後の方はジャンケンで決めていたらしいぞ！）。

シナジー

「うむ、大体いいな」

殿の剛腕によるワンマン政治というか、ほとんど恐怖政治により我が領土の陣営は一新した。

勘と運で決めていった陣営ではあるが、なかなかどうして的確な人選であったと言える内容であり、突発的に総指令官という大役を仰せつかった家来Bにも、やる気を漲らせるには十分な結果となった。

「おいB、まずは我が軍の今まさに成すべき事をまとめておけよコノヤロウがよ。」

際はおれの嗅覚でよ、時がきたならそんな時ア……ガチンと打って出るぞ」

プレッシャーをビンビンに感じているであろう家来Bの心を気遣い、また、浮き足立っているであろう家来Bを始めとする新体制の面々へ、乱暴な口調であれ一歩目のベクトルを示したのは、今まで一人で何役もこなしてきた（ワンマンなので）殿の優しさに他ならない。

「はっ！」という家来Bの返事の後、「おおおお！」と、まるで勝ち鬨のような雄叫びがこの大広間を包んだ。各々が皆目を輝かせ、この領土の繁栄を疑う者はいなかった。

遂にして、この軍が一つになったのである。

「早速であるが！！」やる気に溢れ、まだざわめきが残る大広間に、突然家来Bの声が響いた。

「んん？どうしたんだBコラ」少し驚いた殿がイラついた感じで聞

いた。

「我が軍はどうかこの町自体の話になりますが、まずは聞いてくだされ」

「おおう、そうか」なんだか釈然としない殿を尻目に、家来Bは続けた。

「そもそも私としては十分なバックアップ無くして戦なぞやるべきでは無いと考えます。

即ち！！まずはこの領土全体を一つのファミリーとみなし、各機関が役割を全うし、全てにおいてシナジー効果をもたらす様なそんな画期的なシステムを構築させたいのでござる！

私の見た限りこの領土の可能性はまだまだまだ有り余つとるわ！コノヤロウ！！

兵糧、徴兵、騎馬に武具、戦に関わるあれやこれやも格段に素早く調達可能になるはずじゃアツ！

よいか！？まずは内政を洗い直して豊かにし！行政にて物取りの類を縛り上げ流通の円滑化！

そっからは！分かんだらうが！！

言わずもがな、連戦連勝じゃろうがバカヤロウ！！

ハアツハアツ……！！」

ゴン！「ゲヘッ」

後ろから殿の拳骨が飛んだ。が、今回はいつものイライラからでは無い様子。

「熱くなり過ぎなんだアホがよ」

言いたい事をぶちまけても尚興奮冷めやらぬBだったが、

殿の戒めによりなんとか我を取り戻し、自分の座へと控えた（これ以上殴られたくないので）。

Bが下がったのを確認し、握ったままの拳骨を緩めた後殿はこう続

けた

「…まあよ、総指令官からのお達しだ。おれはなんら異論はねえ。訳のわからん言葉もチラホラあったしよ、そこら辺はこいつに改めて聞いてくれ。」

ほんじゃあ今日んとはこれにて解散だ。てめえら、期待してるぜ」

とにもかくにも新たに動き出した殿様達。

群雄割拠を極めたこの戦国時代に、圧倒的なアレで国中をアレする魔王とその一味のアレが今じわりと動き出したのである！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8162i/>

アイアンマンソウル

2010年10月8日12時59分発行